

教育講演 4



基礎研究から見た脳科学の進歩と理学療法

10月2日(日) 10:40-11:40 会場: 第1会場

名古屋女子大学
医療科学部 理学療法学科
石田 和人

司会: 前島 洋 (北海道大学)

本講演では、私のこれまでの研究から、中枢神経障害に対する理学療法を考える上で、病態動物モデルを用いた研究の功罪を述べたいと思います。

現代における脳科学の進歩の度合いは、すさまじい勢いです。いや、宇宙空間の様に無限に拡張しているかのようです。かたや、脳機能の解析が遺伝子レベルにまで進み、また神経ネットワークの仕組み自体が、コンピュータサイエンスの基盤となりつつあります。本来、このようなグレードの話題を提示すべきところかもしれません。しかし、本講演では、理学療法として応用される「基礎理学療法学」研究の在り方を探ることこそ、これから先に必要とされる「脳科学の進歩と理学療法」であると考えます。私はこれまで、もっぱら中枢神経障害のモデル動物を用いた基礎研究に従事してきましたが、この基礎理学療法学会が目指すところは、単に「理学療法の基礎」を扱う学会ではありません。現在、理学療法学をいくつかの専門分野に分化した学会で扱うようになり、なんとなく理学療法に関連した基礎医学的研究を集めたのが基礎理学療法学会であるかのように誤解されているくらいがあります。やや自虐的になりますが、例えば、単に脳卒中に対する理学療法を研究するために、脳卒中モデル動物を用いた基礎研究を行えば良い、ということではないということが、最近になって、やっと分かってきました。

本講演では、まず、私が取り組んできた、脳卒中、脊髄損傷など中枢神経障害のモデル動物を用いた研究を紹介し、その意義と反省点を述べます。さらに、最近、私が取り組んでいる、「抑うつ」に対する研究を紹介し、さらには、近年、注目されている「腸脳相関」の視点から、抑うつに対する理学療法のカギを探りたいと思います。

「理学療法の基礎」ではなく、「基礎理学療法学」がもたらす成果により、本大会がテーマに示している「基礎研究の臨床への還元」が成し得るものと考えています。

